

大江健三郎

『燃えあがる緑の木』について

——1989～90年の天皇代替わり儀式との関連から——

栞原 丈和

はじめに

大江健三郎『燃えあがる緑の木』三部作は1993年から1995年にかけて文芸雑誌『新潮』にそれぞれ掲載された¹。第一作と第二作の発表後の1994年に大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したことや、発表当時「最後の小説」と称されていたことも合わせて話題になった²。しかし、その後大江健三郎を取りまくノーベル賞ブームのようなものがマス・メディアで消費され切るとともに、後景に退き取り上げられる機会は稀になった。大江健三郎自身が小説前から語っていた「信仰」や「祈り」というテーマと関連づけたり³、小説中で人物たちが読み話題にしているイェーツと関連づけて論じたりしているが⁴、発表当時の社会においてどういう意味を持っているか、について論じたものはない。

本論では、『燃えあがる緑の木』についてその時代性、すなわち発表される直前の時期に話題になっていた事象との関係から読み取ることを目指している。その事象とは1989年から1990年にかけて行われていた、天皇の代替わりの儀式である。日本国憲法下で「象徴」としての天皇が初めて交

替する過程、そこで行われたメディアでの報道や議論はあらためて天皇という存在の現代日本における意味を問うものであった。二度目の交替となる2019～20年の代替わり儀式は、一度目に比べると議論らしい議論がなされることもなくその時のものを踏襲している。かつて代替わり儀式に対して憲法との関係をめぐって強い批判がなされ、また儀式阻止を訴える過激派が盛んにテロを行っていたということを忘れてしまっているかのよう

に。
大江健三郎『燃えあがる緑の木』第一作の冒頭で取り沙汰される「オーバー」から「新しいギー兄さん」への「魂」と「治癒能力^{ヒーリング・パワー}」の継承は、天皇裕仁から天皇明仁への天皇の地位の継承儀式のパロディであり、かつそのオカルトめいたかがわしさを強調したものであった、ということ

大江健三郎自身が語る『燃えあがる緑の木』と現実の事件との関係

『大江健三郎 作家自身を語る』（2007年）において、聞き手の尾崎真理子の問いに答えて大江健三郎は『燃えあがる緑の木』について次のように語っている。

——第一部の発表に際して私が行った九三年の取材で、救い主となったギー兄さんは、「どうしても、一九七〇年代初期の追い詰められた時期の学生運動を、一番若い世代として引き受けた人間である必要があった」というふう

に答えられたのが強く印象に残っています。

私は実際に党派に入って学生運動をしたことはありませんでしたけれど、党派に関わ

つてのさまざまな立場の青年たちとの、接触はずっとありました。（略）
そして私は、このセルフメイク、自分の力で何とか自分自身を作り出そうという考え方、自分の力で歴史を作るという考え方は、現代日本の多くの若者にも現に見える態度であって、その一番過激な典型が、学生運動家の生き方ではないだろうか考えた。そのなかで傷ついて、行き詰まっている人たちが、救いを求める際、日本では大きい既成

宗教がないとすれば、たとえばオウム真理教のような新しい教団が、強い吸引力を持つのではないかと。そのような青年たちがひとつのグループを作り、悲劇が起こり別れて行く、というのがこの三部作の主題の流れです⁵。

大江健三郎は、1980年代以降OまたはKというイニシャルで呼ばれる、愛媛県にある山村を故郷とする小説家を語り手とする小説を発表し続けた。現在は東京で生活する小説家は、時に故郷での体験やそこに伝わる伝承を語り、時に帰郷してそこで生きる人々のことを語っている。『燃えあがる緑の木』で「新しいギー兄さん」と呼ばれる隆は小説家の親戚なのだが、大学時代にかかわっていた「学生運動」にまつわるトラブルを避けて小説家の故郷の村に匿われていた。彼を後継者に選んだ村の長老「オーバー」の死後、彼女の「魂」および「治癒能力」^{ヒーリング・パワー}を継承したものと見なされ、彼を中心に「燃えあがる緑の木」の教会」が村に組織されるのだが、彼の能力を信じず「教会」も否定しようとする人々の間に混乱が生じていく。

『燃えあがる緑の木』以前に書かれていた1980年以降の大江健三郎の「鎖につながれた魂をして」（1983年）、短篇集『河馬に嘔まれる』（1985）に収められた八つの短篇、長篇小説「キルプの軍団」（1988年）、それに「茱萸の木の教え・序」（1992年）といった小説では、「学生運動」や浅間山荘事件などの新左翼の活動にかかわった人々が小説家の周囲に登場し、確かに継続的な関心があったことが読み取れる。また、超自然的な力を求めて「燃えあがる緑の木」の教会」に集まった信者と他の住民との間にトラブルが起こるといっても、1990年代に入ってから長野や熊本での自治体や地元住民とのトラブルがマスメディアで報道されるようになっていたオウム真理教を連想させる。実際、三部作完結の少し後でもオウム真理教との関連を指摘する論はあった⁶。

『大江健三郎 作家自身を語る』で尾崎真理子は「『洪水はわが魂に及び』は連合赤軍事件、『燃えあがる緑の木』三部作はオウム真理教事件をまるで予告したような側面の強い小説でした⁷」と述べているが、小説と現実との関係が一つの事件だけに絞られるということはないだろう。たとえば、今

の発言で言及されていた「洪水はわが魂に及び」（1973年）は、その前年に生じた連合赤軍浅間山荘事件との関連で語られることの多い小説ではあるが、その中に登場する「自由航海団」はかつて指摘したように連合赤軍事件を「予告」したものという以前に、三島由紀夫と楯の会の存在をパロディにしたものとしても読めるのである⁸。

『燃えあがる緑の木』についてもオウム真理教の「予告」ととらえるのではなく、小説発表以前のできごとと関係づけて読む方が妥当である。次節では、『燃えあがる緑の木』と現実の出来事との関係を考えるために、「ギー兄さん」を中心に「教会」が組織されている契機となった出来事の詳細を確認してみよう。

『燃えあがる緑の木』における「魂」と「^{ヒーリング・パワー}治療能力」の継承

まず、『燃えあがる緑の木』三部作にいたる大江健三郎の小説について整理し比較した上で、この小説の独特な部分について示しておこう。

前節で述べたように1980年代の大江健三郎の小説では語り手の小説家が、自身の故郷の村での記憶やそこに伝わる伝承と、自身が東京で生きる中で体験した出来事を語るという設定が繰り返されている。この故郷の村の伝承とは、もともとは長篇小説「同時代ゲーム」（1979年）で描かれた「壊す人」を指導者とする集団が四国の谷間の村に開いた（村＝国家＝共同体）の伝承という形で登場したものだった。その伝承は、短篇小説「罪のゆるし」のあお草（1984年）で初めて、「同時代ゲーム」の作者である小説家が祖母から実際に聞いたものとされ、その設定を活かして書かれたのが「同時代ゲーム」の素材を語り直した「^{リサイクル}M/Tと森のフシギの物語」（1986年）である。以降小説家OまたはKが登場する小説では、彼の故郷の村に独特な伝承があることが自明の前提となっていく⁹。

『燃えあがる緑の木』もその流れで書かれた小説ではあるが、語り手は小説家ではなく彼の親戚の「サッチャン」と呼ばれる「^{アンドロジナス}両性具有」として生まれ当初は男性として生きてきたものの、「転換」して現在は女性として生きることを選んだ人物が担い、小説中で小説家は「サッチャン」から「K

伯父さん」と呼ばれている。

「燃えあがる緑の木」の教会」のリーダー「救い主」である「新しいギー兄さん」は、名前が表すとおり、かつて村で〈根拠地〉の運動をしていた「ギー兄さん」（小説中では区別のために「さき^ゝのギー兄さん」と呼ばれている）の名前を継承している。〈根拠地〉の運動は大江健三郎の旧作「懐かしい年への手紙」（1987年）で小説家を語り手として描かれているものだが、「ギー兄さん」が殺人の罪で入獄したことによりその運動は瓦解し、また小説の結末では彼も暴力に曝されて死を迎える。

第一部の「救い主」が殴られるまで」は、死んでしまった「ギー兄さん」の名前を小説家の親戚にあたる隆という男性が継承するところから始まり、「新しいギー兄さん」をめぐる村のお祭り騒ぎを描いている。『燃えあがる緑の木』全体は「新しいギー兄さん」と「燃えあがる緑の木」の教会」に集う「神の存在を前提としているのではない者たちの〈祈り〉」¹⁰や「救い」を巡る精神的な彷徨（「魂の^ゝこと」）を描いているのだが、本論では「教会」が生まれる契機となった冒頭のできごとに注目する。

隆が「ギー兄さん」となる契機は、語り手「サッチャン」からは「お祖母ちゃん」、村人からは「オーバー」と呼ばれ、「指の磁気」で治療を行なうことで尊崇されていた長老の女性の死である。死の少し前から「オーバー」は村で暮らす青年隆を「ギー兄さん」と呼ぶようになり、その変化が「屋敷」のお祖母ちゃんが、あの人をギー兄さんという懐かしい名前で呼び始められた」というこの小説の書き出しにもなっている。隆は所属していた「長期にわたって内ゲバを続けてきた」「学生運動」の「党派から脱落」した後、谷間の村に移り住んでいた。そして「オーバー」から「土地につたわった話」を聞かされる生活を続けた上で、彼女から「ギー兄さん」として谷間の精神的支柱となることを依頼される（第一章 蘇りとしての呼び名）。「オーバー」が「寝たきり」になってからは「ギー兄さん」は彼が中心となって運営している「農場」で自ら「処理して持ってきた烏骨鶏のスープとお粥」を供したりもしている。

「オーバー」の葬儀の際、火葬の「煙に乗って昇って行く」「オーバーの魂」を「鷹が^{くちばし}嘴にくわえ」、そのまま「ギー兄さん」の元に急降下して

「オーバーの魂をギー兄さんに手渡した」と思いこんだ人々が生じる。今の引用自体、彼らの一人である「自分も立ち合った奇蹟について語りたいという気持ち」が中心にあった。「豆腐売りのお婆さん」の言葉によるものである。彼らの中には「泣き出す者やら拝む人やらも出るほどで、もう誰もが怖ろしいものに打たれたよう」だった（第三章 最初の説教）。

なお、この魂の継承は実際は全く実質を伴っていない。「オーバー」の遺体は秘密裏に森に土葬され、火葬は見せかけにすぎず、「魂」が「煙に乗って昇って行く」ようなことはないのである。

このできごとはそれを目撃した人たちによって「奇蹟」と呼ばれるが、「ギー兄さん」本人にとっては、「浅い草の茂みから」「現れた」野鼠を鷹から守るために「茂みの濃い方へ戻して」やろうとして戯れているうちに生じたできごとにはすぎない。しかし、その後「オーバー」の継承者である「ギー兄さん」に「治癒能力^{ヒーリング・パワー}」を使ってもらうことを期待する、神秘主義的な力を信じる側の人々と、その存在を怪しみ糾弾しようとする人々との対立が生じてくる。後者にとっては、鷹が「ギー兄さん」のところに下りたことごと自体が野鼠を使った「ベテン」であるということになる（第七章「燃えあがる緑の木」）。

この対立はメディアによってさらに増幅されていく。NHKが全国放送したドキュメンタリー番組「治癒能力^{ヒーリング・パワー}で村起し?!」を見た人々が集まり、「ギー兄さん」を中心に「燃えあがる緑の木」の教会が組織される（第五章 森の力は回復しているか?）。一方、彼を批判する勢力も雑誌に掲載された「超能力の「救い主」に疑惑——NHK特集の危険なインチキ」という記事をきっかけに組織されていく¹¹。「ギー兄さん」は敵対する村人やかつての党派から襲撃を受けた後、「第三部 大いなる日に」の末尾で、「教会」に反対する「子弟を奪還する会」の人々が投げた石に撃たれて死ぬ。

このように描かれる「オーバー」から「新しいギー兄さん」への魂の継承だが、このような「奇蹟」が描かれるのは大江健三郎の小説では初めてであるし、また1980年代以降に語られるようになる小説家の故郷の伝承にもこのようなものはない。次節では小説家の語る故郷の死生観、魂の行方

についての伝承がどのように語られてきたのかを確認して、『燃えあがる緑の木』の「奇蹟」がいかに唐突なものなのかを示してみよう。

大江健三郎の小説における死生観・^{オカルト}超自然について

小説家OまたはKの故郷の伝承に魂に関わるものがあることは既に『燃えあがる緑の木』以前の小説で語られていた。それは村人一人ひとりが森の中に自分のための木を持っていて、死後「魂は肉体を離脱すると谷間の宙空に飛びあがって」「さらに大きい輪を描いてのぼり、谷間をかこむ森の高みへ着地」し、「魂は森の樹木のなかで永い時をすご」した後、「グライダー滑空して谷間へ下降」し「あらためて新しい肉体に入る」というものである。ただ、それは元々小説家の少年時代の夢として語られている。

僕は確かに砂川へ行くバスの友人たちに、「魂の離陸」の練習の話をした。しかしそれは子供の時分に一連の定型をなしていた夢のつづきで見た、ひとつの夢の思い出であったのである。森のなかの谷間の子供らが集められて、そここの坂道でグライダー滑空のように地面を走っては、空中に飛びあがる練習をする。死の時がいった際に、魂が首尾よく肉体から脱け出してゆけるように、その「魂の離陸」の練習なのだ。魂は肉体を離脱すると谷間の宙空に飛びあがって、脱けがらとしての遺骸が家族や知人らによって始末される様子を眺めながら、グライダー滑空をつづけている。それからさらに大きい輪を描いてのぼり、谷間をかこむ森の高みへ着地するのだ。魂は森の樹木のなかで永い時をすごす。あらためて新しい肉体に入るために、グライダー滑空をして谷間へ下降する日まで…… この死と再生の手つづきを円滑ならしめるための、谷間の子供らが坂道で、両腕を伸ばしプーンと声に出しながら駈ける、「魂の離陸」の練習。

(「新しい人よ眼ざめよ」1983年)¹²

それが後には夢ではなく実際に村で行なわれた「訓練」として語られる。ただ、それは自分が魂になった時のための「練習」ではなく、「盂蘭盆会に谷間へ降りてくる先祖の魂のため」の「代行」という意味づけである。

坂に集められた子供らが練習したのは、両手を横に伸ばしてブーンといいながら坂道を駆けおける運動である。もし可能ならば、その勢いで浮上して、いくらかの距離を滑空し、さらにその距離を延長することをめざして…… 訓練を指導する女たちが、あらためて意味を説ききかせもせぬまま、子供らみんなが承知していたのは、盂蘭盆会に谷間へ降りてくる先祖の魂のために、訓練を代行している、ということであった。魂たちがあらためて森の高みへ戻るために、坂道を駆けける勢いのままに離陸し、ブーンと滑空して、旋回する輪をしだいに大きくしつつ、螺旋状に上昇する。その離陸を力づけるための訓練だと、われわれ子供らは受けとめていた。女たちは、訓練を指導するといっても、脇に立って不景気面をしているのみだったが、子供らがふざけて県道から川原への坂道をブーンと駆けけようとする、隼のように飛びだして衿首をつかまえ、

——あなたは魂を川へ流してしまうのかな？ と叱りつけた。

（「その山羊を野に」1984年）¹³

前にふれた「M/Tと森のフシギの物語」では、谷間の村の死者の魂は「森の高み」に昇るといふ伝承があり、まず「壊す人」と共に村を拓いた老人たちの死を描く際に、彼らの目指す場所として語られている。

身体の様子が稀薄になり輪郭があいまいになった、なんとも頼りない老人が、空中に消える瞬間には、強い希望をあらわした眼を森の高みへ向ける。その淡い淡い全身が、文字どおり消える直前の灯火のようにパッと輝いて、そのまま消滅する仕方です。¹⁴

また、幕末から明治初めにかけての伝承中の重要人物亀井銘助は死後「森の高みの樹木の根方で、魂として静かに時をすごしている」¹⁵ことが語られもする。

これらのエピソードが融合する形で、「懐かしい年への手紙」では、明確に本節冒頭で述べたような魂の行方についての伝承やそれにかかわる「訓練」が実際のものとして語られるようになる。

——この森のなかの人間は、死ぬと魂が^レ身を離れて、こういうふう^にに旋回して高みに昇って、森のきまった木の根方におちついて、そこにずうっとおるといふけれども、ど

うか知らん？ とくに子供は、死んでも魂の滑空の仕方がわからぬから、あの遊びで訓練しておくというけれど、そのような迷信で自分を訓練したいとは思わんよ！ 魂の訓練を、躰を kullanarak やるのはおかしいと思うが。

—魂になってから始めたのでは、どのように動いていいかわからんから、自分で動かし方を知っている躰と一緒に時に、魂の運動の仕方を練習しておくのじゃないか？

—理屈はそうであっても、もともとが迷信で！

—どうして迷信と言い切れる？ Kちゃん。「幾何」の場合も、はじめこれはありそうにないと考えていて、しかし証明の手づきを踏んでみると正しいとわかる定理が面白いと、Kちゃんはそういっていたらう？

—死ぬと魂が躰から離れて、グルグル回転して森の高い所に昇って、木の根方で、また生まれるまでジッと待っているというのは……

—Kちゃんは、まだ自分が生まれて幾らも経ってないのに、年をとるまで生きた人らが昔から伝えてきたことを、どうして迷信と片づけられるのかな？¹⁶

少年時代の小説家と先代の「ギー兄さん」との間で行なわれた会話であるが、魂についての伝承が「年をとるまで生きた人らが昔から伝えてきたこと」として扱われている。

「懐かしい年への手紙」と同様の設定がなされている『燃えあがる緑の木』で「オーバーの魂」が「煙に乗って昇って行く」と村の人々が考えたのは、この伝承に基づいてのものだと考えることができる。ただ、「木の根方で、また生まれるまでジッと待っている」はずの「魂」を「鷹がくちばし嘴にくわえ」て、「ギー兄さんに手渡した」と思いこむというのは、伝承からはかけ離れた発想である。

さらに「魂」の継承によって、「オーバー」から「新しいギー兄さん」に継承されたと見なされている「ヒーリング・パワー治癒能力」についてもそれまでの大江健三郎の小説に見られないものである。超自然的な事象が大江健三郎の小説に全く出てこなかったわけではなく、たとえば「懐かしい年への手紙」では先代の「ギー兄さん」が少年時代「千里眼」の能力を持っていると見なされ、「南方や中国へ出征している」「若者等の現況を知らせ」ていたことが語られている¹⁷。少年時代の小説家は、「ギー兄さん」が実際に「千里眼」

をしているのを覗き見たりもするし、また「千里眼」で語った内容が元で「ギー兄さん」はトラブルに巻き込まれたりもしている。

その後の小説では、村に訪れた未来予知の能力を持つ「占いの専門家」について語られていたりもする。

敗戦の二年ほど前から、村に疎開者が増えていたが、かれらを中心にした村の有識者サロンで「コックリサン」が流行し、様ざまに将来を占うことがなされていた。そのうちつてをもとめて占いの専門家と呼ぶようにもなった。そして「夢を見る子供」と「夢を読む人」の二人組が、この村に来た。かれらはこの地方に流行していた占いの集りに、わずかな報酬を——それもおもに米や麦を——もらって村から村へと渡り歩く人びとであった。

（「夢の師匠」1988年）¹⁸

ただ、言葉を用いて人を納得させるものである「千里眼」や「占い」と、直接病人に働きかける『燃えあがる緑の木』の「治癒能力」とは一線を画している。登という少年の心臓病を治したという噂が流れ、治療を求める人が彼の元を訪れるようになり、そのことが次第に彼や「燃えあがる緑の木」の教会」を追いつめていく。

ここで考えたいのは、大江健三郎の小説としては急に登場したこの二つの事象、この小説のストーリーを動かしていく上での基盤となる「魂」とヒーリング・パワー「治癒能力」との継承という発想の源である。この見方は現場にいて見ていた人々の噂話として語られるものなので、伝承とは関係なく彼らの想像力が生み出してしまったと考えることもできる。では、彼らの想像力の起源とはどのようなものだったのか。この当時、村の人々（及び大江健三郎）の回りを取り囲んでいた情報とはどういうものなのかを確認してみると、1989年から1990年に行なわれた天皇代替わりの儀式についてのマスメディアの報道が浮上してくる。

1990年代初頭にマス・メディアを賑わせていたこと

そもそも『燃えあがる緑の木』で描かれているのはいつの出来事なのか。小説中では年については記されていないものの、考察する材料として第二部「揺れ動く〈ヴァシレーション〉」に出てくる「ギー兄さん」が書いた「旅行日録」がある。そこには「六月九日、火曜」「六月十日、水曜」というように月日と曜日が記されており¹⁹、その記述を根拠にすると「ギー兄さん」が父親とヨーロッパに旅行に行っていたのは1992年であり²⁰、小説冒頭の「ギー兄さん」の名前の継承、「オーバー」の死、「オーバー」の「魂」の継承は、その二年前の1990年の出来事となる²¹。また、「オーバー」の容態が死に向けて悪化した日のことが「森の外縁をかすめるようにして、台風が通過していた」「秋口」と語られているのからするとおそらく9月頃だったのだろう²²。

この時期日本の社会、日本のマスメディアを賑わせていたトピックで、しかも名前の継承や魂にかかわる^{オカルト}神秘主義と最も近いのは、天皇の代替わり儀式である。名前の継承と、「魂」の継承、それにテレビや新聞といったメディアがその情報を広めていくという過程は、「天皇」という名前の継承と先祖から伝わる天皇という地位の継承にまつわるメディア・イベントを連想させる。そして、当時大きな議論を巻き起こしていたのは、1990年11月12日に行なわれた「即位の礼」ではなく、その同月22日に行なわれた「大嘗祭」の方であった。本節では、「大嘗祭」をめぐる当時の新聞記事を用いてそれがどのように取り沙汰されていたのを確認していく²³。

天皇の代替わりやそれに伴う儀礼は繰り返し行なわれてきたが、冒頭で述べたとおり1989年から1990年にかけて行なわれた天皇裕仁から天皇明仁への交替は、1946年に公布された「日本国憲法」及び1947年に制定された新たな「皇室典範」下での最初の代替わりだった。天皇を「神聖ニシテ侵スヘカラス」（第三條）と定めた「大日本帝国憲法」下でのその前二度の代替わりとは異なる手続きや儀礼が必要とされたわけであり、その後の天皇明仁から天皇徳仁への代替わりもそれを踏襲して行なわれている。

「日本国憲法」下初の天皇の代替わりは天皇裕仁の死が発表されてまもな

くからマスメディアで取り上げられた。どのように進めていくのか、ということが繰り返し議論され、儀式に賛成・反対それぞれの対立する意見が紹介されもしていた。当時の報道に『燃えあがる緑の木』を並べると、その大きな流れをよくふまえて書かれているのが見えてくる。

天皇の代替わりに伴って、まず新たな憲法・皇室典範の下で「即位の礼」・「大嘗祭」などの儀式をどのように執り行うか、当時その宗教性が特に「大嘗祭」について話題になった。1989年1月8日の「平成」への改元直後、既に「即位した天皇に「神格」が付与される宮中の伝統行事」（「大嘗祭を国の儀式とすることを否定せず——政府筋」『毎日新聞』1989年1月11日朝刊）でありかつ「神道の原点ともいえる儀式」で「内閣法制局は「神道色が強く国事行為として行うのは無理」と述べている」（「即位儀式とご葬儀内容 新憲法下、苦心の折衷／天皇崩御」『読売新聞』1989年1月8日朝刊）と大嘗祭について注目が集まっている。「7日の故陛下のご逝去から新天皇の即位に伴う大嘗祭（だいじょうさい）が予定される来年秋までに、主な関連儀式だけで61にのぼる。当然、宗教的色彩の濃いものが多い。「皇室の伝統」を尊重しながら、どう政教分離の原則を貫くか、政府にとってはあまり触れたくないテーマだった」（「政教分離（検証 昭和から平成へ：9）」『朝日新聞』1989年1月17日朝刊）とは言われているが、結局「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」という記述のある日本国憲法第二十条との齟齬、「政教分離原則との関係で論議を呼ぶこと」（「大嘗祭で揺れる「政府見解」 国の儀式化も検討」『毎日』1989年1月12日朝刊）になった。

政府は「宗教的色彩」が強いことを認める一方で、天皇の世襲に伴う伝統的な儀式である点を強調することで、「公的性格」があると」（「大嘗祭は公的皇室行事 宮廷費で充当 政府見解固まる」『読売』1989年12月15日朝刊）主張した。注目したいのは儀式の「宗教」性を政府が認めたということであり、確かにこの後新聞で紹介される様々な手続きはその宗教を信仰しない者から見れば、「非合理的」で「荒唐無稽」なものに見えるだろう。そのいかがわしさを払拭するためにも、「大嘗祭の歴史的な位置づけについては、「上古から行われた皇室の長い伝統を受け継ぐ儀式」とする意見と、「律令制下と、近世武家政権下と、明治以降のものとは実質的に異なり、伝統的儀

式とは言えない」という意見が対立して」（「大嘗祭について有識者の意見公表政府」『朝日』1989年12月14日朝刊）いるにもかかわらず、「即位の礼」や「大嘗祭」が「伝統的な儀式である点を強調」していたのである。

「大嘗祭」自体が持つ意味については、最初に引用した『毎日』の記事のように、天皇の「神格」にかかわるものであるという説を紹介する記事があった。『読売』も「天皇はそれによって神格を得るとも言われる秘儀」（『ミニ時典』大嘗祭）1989年12月15日」という解説をしている。

しかし、1990年に入って実際の儀式が近づくまでの間に宮内庁の見解が固まり、「天皇が神格を得る意味合いがあるとの説が学界などにあることに触れ、「特別の秘儀はなく、天皇が神前で読み上げる御告文（おつげぶみ）にもそのような思想はない」と否定」（「宮内庁、「大嘗宮の儀」で見解 神格の獲得を否定」『朝日』1990年10月20日朝刊）した上で、「天皇が即位後初めて大嘗宮で新穀を皇祖・天照大神と天神地祇に供え、自らも召し上がり、神々に安寧と五穀豊穰などを感謝し、その継続を国家、国民のために祈る儀式」（「大嘗祭の式次第を発表——宮内庁」『毎日』1990年10月20日朝刊）と主張したことで、「天皇が即位後初めて新穀を天照大神や神々に供え、自らも召し上がって安寧と五穀豊穰に感謝し祈るという儀式」（「天皇陛下即位の礼特集 「即位の礼」「大嘗祭」はこのように行われる」『読売』1990年11月7日朝刊）として扱われるようになっていく。

ただ、大嘗祭と天皇の「神格」との関係は、その後も識者の意見という形で紹介されたりはする（「62年ぶりの大嘗祭 古代再現する秘祭 水野祐・早大名誉教授に聞く」『読売新聞』1990年11月21日朝刊）。たとえ天皇の「神格」との関係を否定したとしても、「皇祖・天照大神」や「天神地祇」に祈念することは認めており、更にその準備として儀式で使う米を採取する田を選ぶために「亀卜」を行うことを紹介するなど（『ミニ時典』大田主）『読売』1990年11月20日朝刊）、宗教儀式であることは強調され続ける。政府・官庁が宗教儀式を主催することについて批判する声も多くあがり、儀式を奉祝する動きも反対する動きも共に報じられている（「各地で儀式に向けた動き 反対運動も急——即位の礼・大嘗祭」『毎日』1990年1月8日夕刊、「即位の礼、伝統重視か憲法順守か 儀式巡り論争へ」『朝日』1990年1月20日朝刊）。

そのように「市民レベルの賛否の議論、運動」が「活発化」（「即位の礼・

大嘗祭 賛否議論が活発化』『毎日』1990年1月19日夕刊) しつつも、「即位の礼」「大嘗祭」はメディアイベントとして着々と準備が進んでいく。62年前の天皇裕仁の即位式の際にはなかった「テレビカメラが入り、儀式の様がお茶の間に逐一中継される」ことが予告され(「90年秋予定の「即位の礼」「大嘗祭」は62年ぶり 皇室絵巻に「平成流。も」『読売』1989年12月22日)、一方で「天皇家のタレント的扱いは、厳に慎むべき」という識者の意見も紹介されているが(「90年秋の「即位の礼」「大嘗祭」 樋口恵子さん、岡野加穂留明大教授の意見」『読売新聞』1989年12月22日朝刊。引用は岡野加穂留の談話)、実際にその意見が尊重された様子はない。

そのようなマスメディア上の議論にはおさまらない、直接の攻撃を試みる過激派の動きも活発になっており、対策のために「警視庁に公安機動捜査隊」が発足したこと(「過激派ゲリラと要人テロを防げ! 警視庁に公安機動捜査隊が20日発足」『読売』1989年10月17日朝刊)や、儀式の3ヶ月以上前から「首都が厳戒態勢」に入ったこと(「即位の礼・大嘗祭に向け、首都は警戒態勢入り ゲリラ防止へ検問」『朝日』1990年8月1日朝刊)が報じられたりもする。繰り返し報じられる中核派・革労協など過激派のテロ(当時の報道では「ゲリラ」)の中には、「大嘗祭」後に天皇や皇族が訪れる予定になっていた伊勢神宮への経路となる近鉄電車沿線でのテロも含まれている(「京都など4府県の近鉄沿線で多発ゲリラ 車両など焼く」『読売』1990年11月19日夕刊)。実際の伊勢神宮への「親謁の儀」は嚴重な警戒のもとテロに遭うこともなく、秋篠宮夫妻等を伴った天皇・皇后はテレビカメラに撮されながら儀式の全日程を終了した。

原武史・吉田裕編『岩波 天皇・皇室事典』によると、柳田国男は「ひそかに書かれた「大嘗祭に関する所感」の中で」「即位礼と大嘗祭という性格の違う2つの儀礼が続けて行われたことを鋭く批判」している²⁴。その理由は「秘儀である大嘗祭」が「即位礼から続くお祭り騒ぎの最中に行われ」「原始の形式」(たとえば「物忌み」)を守っていないことである。柳田国男の言う「お祭り騒ぎ」とは、天皇の交替が国家・国民を巻きこむイベントとして短期間で行なわれ、関心を失われない、飽きられないようにしたことを批判した言葉なのだろう。そして、その当時はなかったテレビ中継が1990年の「お祭り騒ぎ」にさらに拍車を掛けていた。「即位の礼当日に行わ

れたオープンカーでのパレードを見るために集まった人の数」が1959年の「皇太子明仁と美智子妃の成婚パレード」の53万人と比べて約12万人と減っていることから、「天皇制の草の根の動員力にもかげりが見え始めている」という評価もあるが²⁵、当日のテレビ中継の視聴者の数を考えれば逆により多くの人を「動員」したとも言えるだろう²⁶。

しかし、その「お祭り騒ぎ」の一方で、大嘗祭はテレビ中継もなく、隠されることで神秘的なものにとどめられている。メディア・イベントと秘密の儀式を同時に行う、つまり儀式に二つの側面を持たせることで、天皇の二つの層を同時に機能させることができるのである。

代替わり儀式の虚構性と拭えぬいかがわしさ

以上のように、マスメディアが報じる1989年から1990年にかけての「即位式」・「大嘗祭」を取り巻く状況の中には、『燃えあがる緑の木』第一部「救い主が殴られるまで」と重なる要素が多く見つけることができる。「非理性的で荒唐無稽」な行事がメディアを通じて全国に伝えられ、反対する者たちも含めて日本全体を巻きこんだ「お祭り騒ぎ」となっていた天皇の代替わり。その不自然さとそれ故に必要なとされた様々な意味づけについて、谷間の村を縮図として描いたパロディが『燃えあがる緑の木』なのである。

「天皇」「ギー兄さん」という呼称が死者から生者へと継承され、呼称を継承した者は「天照大神」「オーバー」に食事を供する。さらに、(真偽は別として)前者では「神格」を付与される儀式が行なわれたという報道がなされ、後者では「魂」の継承が行なわれたという噂がなされる。報道や噂によって、人が集まり「お祭り騒ぎ」が起き、同時にそれに反対する人々もまた社会・村を騒がせる。「過激派」「党派」のテロ行為も活発化する。

『燃えあがる緑の木』では「ギー兄さん」への魂の継承は「奇蹟」と呼ばれているが、それについて「近代的な理性によっては非合理的と呼ばれそう」であり「非理性的で荒唐無稽だと思われる」かもしれないが「地縁血

縁といった人と人との関係が緊密で、ローカルな伝承がいまもなお力強く息づいているような共同体に生きた・生きている経験のある読者」には「リアル」に感じられるのではないか、という評価がある²⁷。この見方は天皇の代替わりのための儀式にもあてはまるだろう。メディアを通して「リアルな」ものとして伝えられながらも、実際には「非理性的で荒唐無稽」な一連の儀式が現代日本で行なわれていたことをこの場面は浮き彫りにしている。

この重ね合わせで説明できないのは「オーバー」から「新しいギー兄さん」に継承された「ヒーリング・パワー治癒能力」である。一つの説明としては、前に述べたように『燃えあがる緑の木』三部作をオウム真理教の事件と関連づけて捉える見方がある。確かに当時この教団は超能力の研究をしていたと報道されてはいたが²⁸、オウム真理教、または教祖麻原彰晃には病を癒す力があるという情報が発信されているのは見つけられなかった。

この「ヒーリング・パワー治癒能力」については「オーバー」が村の長老的な女性であることと、原武史の大正天皇の皇后節子についての指摘を重ねることが補助線になる。皇后節子は自作の歌の中で「[皇后霊]という概念を提示し」、また慈善事業に熱心であり、病院を慰問した際に「千人の垢を流す誓願をして九百九十九人の垢を流し、最後の一人のハンセン病患者の垢を清め、全身の膿を自ら吸ったという伝説」のある光明皇后のことを詠み、自身に重ね合わせていた、という²⁹。彼女は光明皇后だけではなく、神功皇后、オトタチバナ姫などの女性に熱心に祈りを捧げ、宮廷儀式を天皇が行なうことにも熱心であったという。神道思想家寛克彦の「神ながらの道」を聴いて「[最高の 天照大御神様も女神様]であるのだ。[清明心]を磨き、正しい信仰を持ち続ければ、アマテラスと一体になれることを、皇后は改めて確認したのではないか」と原卓史は述べている³⁰。皇后節子以来、皇后は皇室の慈善、いわば「治癒」の側面を担ってきたのだが、その役割のパロディとして「オーバー」の「ヒーリング・パワー治癒能力」があり、またそれがいかかわしい「奇蹟」を通して「ギー兄さん」に受け継がれることで、『燃えあがる緑の木』冒頭の出来事は天皇だけではなく、皇后も含めた皇室、天皇制全体のパロディとして読むことができるわけである。

戦後日本における天皇と戦後文学

天皇の代替わりとそれに伴う改元という事象については、次に引用する小説家大岡昇平の身も蓋もない発言が正鵠を射てしまっている。

私は戦後四十年とって、切りのいい数字だから何か一区切りのようにいうのには反対である。歴史を天皇在世で区切ることにむろん反対、一〇〇年一世紀に切るのも反対だ。社会に重大な変化の生じた年で切るべきで、戦後でいえば二十七年の単独講和、三十五年安保の反対運動、三十九年オリンピックと高度成長のピーク、四十八年の石油ショックというように、「時間」ではなく「コト」で、区切るべきだ、と思っている。³¹

文芸雑誌『群像』の「私と「戦後」 戦後四十年目に」という特集に寄稿しながら、特集の企画自体を批判した一節だが、確かに改元も世紀の区切りも、さらにはたとえば十年ごとに区切られる年代という変化も、それ自体には何の意味もない。

その一方で歴史学者の樺山紘一が指摘するように「もともと元号の改定は、時代の更新をねらっておこなうものだった」³²という面もある。それは一世一元制を採用する前の吉凶によって元号を変えていた時代の話ではあるのだが、現在でもマスメディアは区切りが意味を持つかのように盛んに情報を発信しているし、元号の変更・天皇の代替わりが社会に何らかの変化をもたらすと考えたい人々もいる、ということなのだろう。一方でそういう過剰な情報に対して批評的に機能する表現も生まれることになる。

「大日本帝国憲法」下での天皇制については「顕教」と「密教」との比喻でとらえる見方がある。1956年に刊行された久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』は、「初等・中等の国民教育、特に軍隊教育」を通して天皇を「絶対とみる」「顕教」と、「天皇の側近や周囲の輔弼機関」が「天皇の権威」を「シンボリック・名目的権威」「憲法その他によって限界づけられた制限君主とみる」「密教」という二つの天皇観が存在したという見方を提唱した³³。

天皇は、国民にたいする「たてまえ」では、あくまで絶対君主、支配層間の「申しあ

わせ」としては、立憲君主、すなわち国政の最高機関であった。小・中学および軍隊では、「たてまえ」としての天皇が徹底的に教えこまれ、大学および高等文官試験にいたって、「申しあわせ」としての天皇がはじめて明らかにされ、「たてまえ」で教育された国民大衆が、「申しあわせ」に熟達した帝国大学卒業生たる官僚に指導されるシステムがみ出された。

たとえば本節の冒頭でも言及した戦前からの知識人、「官僚」ではなかったものの「帝国大学卒業生」の一人である大岡昇平は、病床に就いた天皇裕仁の死期が近いことを意識した際に「裕仁天皇重篤の報を聞いてまず思うのは、「おいたわしい」ということです」と述べている³⁴。「申し合わせ」を知っていた大岡昇平からすれば裕仁は「昭和天皇」という役割を演じる個人に過ぎず、彼は天皇の「神聖」については一顧だにしていない。

一方、敗戦当時にまだ国民学校の生徒だった大江健三郎は次のような回想を残している。

天皇は、小学生のほくらにもおそれ多い、圧倒的な存在だったのだ。ほくは教師たちから、天皇が死ぬといたらどうするか、と質問されたときの、足がふるえてくるような、はげしい緊張を思いだす。その質問にへまな答えかたでもすれば、殺されそうな気がするほどだった。(略)

御真影というものに、どんな顔がうつっているのか、ほくは好奇心にかられながら、決してそれをまっすぐ見ることはできなかった。見たらさいご、眼がつぶれてしまう。

ほくは病気になったとき、白い羽根を体いちめん生やした、鳥のような天皇が空をかけてゆく夢をくりかえして見た。そしてほくはおそれおののいた。³⁵

「初等・中等の国民教育」を受けただけでは、天皇を「絶対君主」として以外には見ることはできなかったわけである。

周知の通り、この「たてまえ」である「顕教」と「申し合わせ」である「密教」との並立は、「朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、単ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ」という記述を含む1946年の新年「詔書」や、同年11月3日に公布された天

皇を「日本國の象徴であり日本國民統合の象徴」と定める「日本国憲法」によって終わり、天皇を人間・一個人とする後者に統一された。

とはいえ、天皇が神の子孫である、天皇の存在がその「神聖」によって保証されているという見方はその後も温存され、いわば「密教」と「顕教」が逆の立場で継承されている。そして「密教」であるはずの神聖なる天皇という見方は、天皇代替わりの儀式において顕在化されることになる。

繰り返しになるが、「大嘗祭」は国家神道を信仰していない者から見ればオカルト神秘主義めいた手続きを踏んでいるし、また儀式後は天皇の先祖とされる天照大神に即位の報告をするために伊勢神宮に詣でたりもする。実在しない神が先祖であるということ自体が天皇の権威の虚構性を明らかにしているとも言えるのだが、この虚構をマスメディアは現実として追認する。肯定する意見も否定する意見も同時に紹介しつつ、あくまでも判断が困難な問題として先送りにする。距離を取ったところから見て、語り、しかしてきればふれずにおきたい腫れ物のように扱われるのが天皇なのである。

1988年12月に亡くなった大岡昇平はこれらの儀式を見ることは無かったが、そのかわり現代日本に対する強い問題意識を持った後継の小説家である大江健三郎によってパロディ化を試みわたされたわけである。『燃えあがる緑の木』は天皇をめぐる虚構を、そのいかがわしさを際立たせるように、よく似た代替わり儀式を通して描いたのである。

2019年の「平成」から「令和」の代替わりは、一度前例ができてしまっているからか、前回ほどの「お祭り騒ぎ」になっておらず、儀式次第を自明のものとして流されていく危険性が感じられた。前回の代替わりの際に書かれた小説を検討することを通して、その危うさが明らかになったことを示して本論を終える。

注

- 1 第一部「[救い主]が殴られるまで」『新潮』1993年5月号、第二部「揺れ動く〈ヴァシレーション〉」同1994年6月号、第三部「大いなる日に」同1995年3月号。
- 2 たとえば1993年12月10日に行なわれた講演のタイトルは「私の最後の小説、『燃えあがる緑の木』」、(同名のカセットブックが新潮社より発売されている)、第三部「大いなる日に」発表後の新聞記事にもそういう前提で書かれたものがある。

- 3 門脇佳吉「大江文学の源泉＝顕現現象とは何だったのか」『世界』1995年7月号、下山嬢子「大江健三郎『燃えあがる緑の木』の〈教会〉——「信仰を持たないもの」の祈り——」『日本文学研究』57号、2018年、など。
- 4 斎藤和明「『燃えあがる緑の木第1部「救い主」が殴られるまで』とイエイツの「揺れ動く」について」『キリスト教文学研究』14号、1997年、高柳俊一「『燃えあがる緑の木』第三部「大いなる日に」——イエイツの詩的ヴィジョンの追求と大江健三郎の小説世界——」同前、など。
- 5 大江健三郎（聞き手・構成尾崎真理子）『大江健三郎 作家自身を語る』新潮社、2007年。218-219頁。
- 6 川村湊「『燃えあがる緑の木』三部作——アムビギュアスな世界」『國文學解釈と教材の研究』1997年2月臨時増刊号。
- 7 『大江健三郎 作者自身を語る』（前出）。222頁。
- 8 栗原丈和「大江健三郎と自衛隊、その持続性」『述』（近畿大学国際人文科学研究所紀要）6号、2013年。
- 9 「『罪のゆるし』のあお草」には「『同時代ゲーム』で壊す人という名を冠した、谷間の生活圏の創建者である神」『いかに木を殺すか』（文藝春秋、1984年、246頁）という表現があり、「壊す人」という呼び名自体はフィクションだったのだが、「M/Tと森のフシギの物語」以降は伝承の中での実際の呼び名として用いられるようになる。
- 10 一條孝夫『大江健三郎 その文学世界と背景』（和泉書院、1997年）の「I 大江健三郎の人と作品」。54頁。
- 11 『燃えあがる緑の木』におけるマスメディアの役割については、小野正嗣「100分 de 名著 大江健三郎 燃えあがる緑の木」（NHK出版、2019年）における指摘が既にある。
- 12 『新しい人よ眼ざめよ』講談社、1983年。258-259頁。
- 13 『いかに木を殺すか』（前出）。197頁。
- 14 『M/Tと森のフシギの物語』岩波書店、1986年、139-140頁。
- 15 同前、254頁。
- 16 『懐かしい年への手紙』講談社、1987年。61頁。
- 17 同前、19頁。
- 18 『僕が本当に若かった頃』講談社、1992年。90頁。
- 19 『揺れ動く〈ヴァシレーション〉』新潮社、1994年。190及び192頁。
- 20 1980年代以降1990年代初頭まででは「六月九日、火曜」となるのは他に1981年と1987年であるが、『燃えあがる緑の木』で語られている小説家Kにまつわる過去の出来事・家族の年齢から該当しないと判断した。
- 21 小野正嗣「100分 de 名著 大江健三郎 燃えあがる緑の木」（前出）では、小説中の「ヒカリさん」が発表したCDを大江健三郎の息子大江光の『大江光の音楽』（1992年）と類推して2年遅い1994年にヨーロッパ旅行の時期を同定しているが（77頁）、これは「旅行日録」の月日・曜日表示を見落としたものと思われる。
- 22 「『救い主』が殴られるまで」新潮社、1993年。34頁。
- 23 本論で参照した新聞記事は、インターネットデータベース「聞蔵Ⅱ」（『朝日新聞』）、

- 「毎索」（『毎日新聞』）、「よみうり歴史館」（『読売新聞』）に基づいている。
- 24 原武史・吉田裕編『岩波 天皇・皇室辞典』（岩波書店、2005年）の「柳田国男」の項目（原武史執筆）による。171頁。
 - 25 『岩波 天皇・皇室辞典』の「改元」の項目（吉田裕執筆）による。374頁。
 - 26 「天皇「即位の礼」関連のテレビ番組視聴率、50%超す」（『毎日』1990年11月13日夕刊）によると、関東地区で「正殿の儀」の中継はNHKが31.9%、民放の合計で21.5%、「パレード」の中継はNHK、民放の合計ともに29.0%だったという。
 - 27 小野正嗣『100分de名著 大江健三郎 燃えあがる緑の木』（前出）。30頁。
 - 28 たとえば「[日本がみえますか] 世紀末の神サマ／17 覆面行進 出家に映る「時代の顔」」（『毎日』1992年9月5日大阪朝刊）など。
 - 29 原武史『皇后考』講談社、2015年。引用は講談社学術文庫（2017年）、293頁および255頁。
 - 30 同前、364頁。
 - 31 「狡猾になろう」『群像』1985年8月号。引用は『大岡昇平全集』22（筑摩書房、1996年）。562-563頁。
 - 32 「いま、歴史は一巡した」『昭和のこころ 文化人三十六人の熱き思い』毎日新聞社、1989年。
 - 33 岩波新書、1956年。引用は次のものも含めて久野収が執筆した「IV 日本の超国家主義——昭和維新の思想——」の「天皇の国民、天皇の日本」の節による。132頁。
 - 34 「二極対立の時代を生き続けたいたわしさ」『朝日ジャーナル』1989年1月20日号。引用は『大岡昇平全集』22（前出）。689頁。
 - 35 「無分別ざかり」『週刊朝日』1959年1月4日。「〈戦後世代のイメージ〉」と改題され『厳肅な綱渡り』（文藝春秋、1964年）に収録されたものを引用した。